
ヴィンセンツォ・チマッティ生誕 125 年記念

1879年 - 2004年

オペラ『細川ガラシア』今秋上演

ヴィンセンツォ・チマッティ氏は、1879年イタリアのファエンツァに生まれ、1926年来日し、1965年10月6日調布でこの世を去りました。自然科学と哲学・教育学の博士号を有し、パルマ音楽大学院でコーラスのマエストロのディプロマを修得した氏は、宣教師、作曲家、音楽家として40年間日本で活動し、2000回ものコンサートを開催したと言われ、1934年当時の満州、北朝鮮、韓国でも開いたことがありました。国際的にも有名なテノール藤原義江氏やヴァイオリニスト江藤俊哉氏もそのコンサートに協力しています。

チマッティ氏が残した950ほどの作曲は、イタリア人作曲家イノ・サヴィニ氏により集められ、故郷のファエンツァ市立図書館と、東京調布市の「チマッティ資料館」に保存されています。その中に49の歌劇があり、特に注目されているのはオペラ『細川ガラシア』です。

オペラ『細川ガラシア』成立の経緯

1940年の『細川ガラシア』

1940年1月24日、東京「日比谷公会堂」で2幕5場の『細川ガラシア』が2回上演され、同年5月18、19、20日には大阪の「朝日会館」で3回上演されています。

脚本は、上智大学のヘルマン・ホイヴェルス氏が歌舞伎演劇として書いた5幕の作品(ホイヴェルス著『戯曲選集』東京1973年版、中央出版社)を、冠九三氏と高木次郎氏が2幕に縮小し、チマッティ氏がその中から12曲を作曲したものです。山本直忠氏(著名な指揮者故山本直純の父)がオーケストレーションと指揮を担当し、歌舞伎座の市川猿之助の全面的協力により片岡右衛門も出演し、洋楽側からは今泉威子、藤間清枝、坂東彌三郎、市川光男などが出演しました。戦後この作品をオペラにするために尽力した神宮寺雄三郎氏は、この時にはバテレンのセスペデス役を引き受けています。

チマッティ氏は、1940年1月31日イタリアに出した手紙にこう書きました。「メロディーはイタリア的ですが、当然、環境の雰囲気と好みに合わせて、日本独特のメロディーも取り入れています。この作曲は、日本でまだ生まれていないヨーロッパ風のオペラの

ための下準備といえます。」

この言葉からも明らかなように、氏はいつの日かこの作品を真のオペラ（グランドオペラ）に仕上げるつもりでした。

なお、その年の秋には日本人による最初のオペラといわれる山田耕筰の『夜明け』（後に《黒船》と呼ばれた）が上演されています。

1960年の『細川ガラシア』

戦後、この音楽ドラマの魅力と価値を知っていた国民歌劇協会の神宮寺雄三郎氏は、「グランドオペラ」にするように何回もチマッティ氏に依頼し、1954年から1959年までドラマ全体の歌やピアノ伴奏が作り直され、現在の3幕のオペラ『細川ガラシア』が生まれました。神宮寺氏はチマッティ氏の元で原本を写譜し、現在、原本も写譜も「チマッティ資料館」に保存されています。これに基づいて、作曲家塚谷晃弘氏がオーケストレーションを作り、ここにオペラ『細川ガラシア』が誕生しました。

明智光秀の三女として生まれた主人公細川ガラシアは、細川忠興の妻となり、父が織田信長を殺した後、夫への忠誠を守るため自らの命を捧げることにしました。その毅然とした姿は多くの幅広い日本の聴衆の心に強い共感を与えつづけ、今日に至っています。

オペラの初公演は、1960年5月27、28日東京の「文京公会堂」にて、大谷冽子のガラシア役で行なわれています。この公演にチマッティ氏も参加しましたが、その隣に座っていたヘルマン・ホイヴェルス氏は、後日こう証言しています。

「チマッティ神父は、自分が作曲したメロディーを聞こうとして耳をすませていたが、それはなかなかあられなかった。オペラのあらゆるところ、チマッティ氏の心から湧き出た新鮮で快い音楽が冷まされたり、抑えられたりして、作品が作り変えられていたのである。ガラシアの有名な別れの歌の高音も下げられているのを耳にしたとき、チマッティ神父は寂しそうに頭を下げ、「御むねのままに！」とつぶやいた」

つまり、自分の音楽がオーケストレーションによって変えられたので、原作者の本人は満足しなかったということになります。

同じ形で1965年1月23日「読売ホール」で上演されましたが、当時病床についていたチマッティ氏は参加していません。

1966年5月5日と6日には、日本を代表するオペラ演出家 粟国安彦氏の監督の元で虎ノ門ホールで公演され、さらに1967年10月6日、東京文京公会堂で公演されましたが、チマッティ氏はすでに1965年10月6日他界していました。

その後、近年では、1989年1月21日熊本市、27日は東京で、熊本出身の作曲家

出田敬三氏のオーケストレーションで上演されています。しかし、これもまたその音楽は到底チマッティ氏の作曲といえないものでした。脚本を含め、歌も大部分が大幅に編曲、改変されていたのです。

2004年、原曲に忠実な『細川ガラシア』

以上、「チマッティ資料館」に保存されている資料に基づいて明らかになった、チマッティ作曲『細川ガラシア』の戦前・戦後を通しての成立と上演の経緯です。

このオペラは、外国人による日本語の最初のオペラ、イタリアと日本音楽を融合した興味深い作品、日本の洋楽受容史に確かな地位を占めているもの、日本におけるヴィンセンツォ・チマッティ氏の音楽的なオリジナリティを見事に証明するものとなっています。また注目すべきは、この作品が氏の最後の大きな作曲であること。実際、着手したのは75歳の時、完成したのは80歳の時でした。本人は、1960年の公演のために書いたメッセージの中に次のように述べています。

「3年間、時間にとらわれず自由に楽しみながら書くことができました。そして私の作品の最も大きなものです。日本歌劇の樹立を目指して永年努力している神宮寺さんのお役にたてば幸いです。」

1963年11月8日、病床にいたチマッティ氏は、日本の文化に貢献したことを認められ、「勲三等瑞宝章」を授けられました。以前、イタリア政府からも2回勲章を受けていたのです。

今年、ヴィンセンツォ・チマッティ氏生誕125周年にあたります。その記念に、10月6日の命日の後、8日と9日、今こそ本来のオペラ『細川ガラシア』を忠実に紹介すべき時が来たと判断しました。そのため、まず、オリジナルに忠実な、優れたオーケストレーションが必要であると判断し、慎重な人選を経て、その卓越な技量において海外でも多くの受賞歴があり、特にオーケストレーションに比類なき才能を発揮している作曲家小栗克裕氏にお願いすることにしました。

お願いするにあたり、上記のオペラ成立の経緯をご説明し、氏の十分なお理解と音楽的な熱意を得られました。

以下オペラ『細川ガラシア』公演実施概要を付記いたします。

チマッティ資料館

館長ノガエタノ・コンプリ

AMICI MUSICA DON CIMATTI 実行委員会 代表 ガエタノ・コンプリ神父